
永久の誓言

楠木憂姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の誓言

【Nコード】

N3307BA

【作者名】

楠木憂姫

【あらすじ】

頭脳・容姿・運動神経…。

人が持つすべての才能において最高レベルの者が集う全寮制の月ヶ丘学園。

そこに通う平凡な少女、莉央。

彼女が学園で過ごす16歳の誕生日…。

満月の下、すべての闇が動き始める……。

開眼の刻

真つ暗な闇…

暗闇に消えた記憶…

あたしには何も無い

何も残ってない

あたしはダレ？

「じいばあちゃん？」

蘇ることのない記憶…

あたしは見た

その闇に消えた記憶の中に

微かに輝く光

闇に飲み込まれない光

その光にあたしは手をのばした

温かい光

優しい光

その先にあったのは

月華に照らされた

たったひとつのあたしの居場所

『…時は満ちた』

あなたは誰？

『目覚めるのだ…』

ドクン…

跳び跳ねた鼓動とともに少女は目を覚ました。

「また…この夢…」

少女はさっき見ていた夢のことを考えながら時計を見た。

「10時20分…。…。ち…遅刻だー!!」

少女の名前は望月莉央^{もちづき りお}。高校1年生。

容姿は中の上くらいだが、その他の頭脳や運動神経などはゼロに等しい女の子。

「ぐすつ…ぐすん…」

昼食時間。莉央は食堂で泣いていた。

「だって、先生ヒドイんだよ。ぐすつ…。確かに遅刻したあたしが悪いけどさあ…。ぐすつ。2時間ずつと廊下に水入ったバケツ持って立たされてたんだよ!!みんなあきれて…笑ってるし…ぐすつ」

莉央は思いつきり鼻をかんだ。

「あのさ…。目の前で泣かれると飯まずくなるんだけど…」

そう言って莉央の目の前で昼食をとっているのは五十嵐魁人^{いがらし かいと}。高校1年生で莉央の幼馴染。走り高跳びの成績は全国1位。その他スポーツなら何でもできる運動神経抜群な男。

「魁人のバカ!!!ふつう慰めるでしょ!!!」

魁人はみそ汁を飲みながら言う。

「自らバカさアピールしてどうすんだ、お前」

莉央は魁人の言葉にピクツと反応し、箸をおいた。

「だって…あたしは所詮バカだもん。そんなの分かってるし…。なのに…なんであたしみたいなのがこんな学校にいるんだろう…」

魁人はみそ汁を飲む手を止め、莉央を見た。

莉央と魁人が通うこの月ヶ丘学園は各分野でトップクラスの実績、才能を持つ者が集う全寮制の超名門学校。その分野ごとにクラスが分かれており、運動能力を基準値とする《スポーツ科》、容姿や芸術感性を基準値とする《芸能科》、学力を基準値とする《特学科》、そして3つの科のいわば落ちこぼれが集まる《普通科》で構成されている。

莉央が中学3年生のとき、学園から普通科への推薦があった。普通科は学園入試を受け、各科の基準値に満たなかった生徒の中から選ばれる科。

そういう中で普通科への特別待遇など例がなく、みんなが不振に思っていた。張本人である莉央はなおさらのこと。

そんな莉央の気持ちに気付いた魁人は莉央のためにスポーツ科の入試を受け、主席で合格し、特別待遇生として入学を決めた。魁人がともに入学するというだけでその時の莉央は安心。

だが、やはり莉央には場違いな学園で入学してからは莉央の不安は

日々募る一方だった。

「はぁ…」

莉央はため息をついた。

ポコッ

魁人が莉央の頭を叩いた。

「いったーい！！何すんのよ、魁人」

莉央が頬を膨らませると魁人が言った。

「こんな頭のかたいヤツばかりの息詰まる学校で…。お前みたいなバカが1人いたら明るくなるとか思ったんじゃないかねえの？」

「バカつて…。何回も言わな…」

「だから、笑ってるよ。お前は」

魁人はそう言ってそっぽを向いた。

「魁人…」

莉央は魁人を見て微笑んだ。

昼食をとり、莉央と魁人は教室に向かうため廊下を歩いていた。

「ふああ…。次、ずっと筋トレかあ」

魁人はあくびをしながら言った。

「スポーツ科は大変だね。ずっとトレーニングだし」

「人の心配してる場合かよ」

「ハハハハ…。次、古典んだけどさ、もうワケ分かんない。反語って何！？みたいない！」

「・・・」

「あつ。今、またバカって思ったでしょ？思ったよね」

「別に…」

「むぎゃー！！なんで運動神経抜群のくせにあたしより頭もいいのよ！…」

莉央は魁人をポカポカ叩こうとするが魁人に頭を押さえられ、手が届かない。

「むかつくー！！」

「はあ…」

「莉央ちゃん!!」

いきなり誰かが莉央に抱きついた。

「きゃあ!!…って翼くん？」

「今日もカワイイね、莉央ちゃん」

ゆづきつばき 結城翼。莉央と同じ普通科の男の子。極度の女好き。

入学当初は芸能科にいたが、初対面で莉央を気に入り普通科へ転科した。

芸能科にいただけあって整った容姿をもっており、女子なら誰でも振り返ってしまうほど。

「翼くん。…あの…」

「何？」

ニコニコ笑う翼に怖い顔つきの魁人が言った。

「はなしてやれよ」

「なんで？」

翼はたくらむような笑顔で魁人に聞く。

「結城…」

魁人の機嫌がどんどん悪くなる。

魁人はどうも翼くんが苦手らしい。

「か…魁人！！落ち着いて！！翼くんもはなして！！」

「ええ…。莉央ちゃん冷たいなあ」

笑いながらそう言う翼が前を見ると、彼の顔から一瞬その笑顔が消えた。

「翼くん？」

「オレ、職員室に呼ばれてんだった。莉央ちゃん、また教室でね」

翼はにっこり笑ってそう言い、来た道を引き返して行った。

「翼くん…。どうしたんだろう」

「相変わらず変なヤツだな」

「ははは…」

莉央と魁人が話していると前から集団がやってきた。

「やあ、望月さん」

集団の先頭に立ち、莉央に話しかけてきたのは神宮寺玲央じんくうしれんお。学園の生徒会長で、理事長の息子。

生徒会は各分野が偏りなく総合的に優れた者、つまりエリート中のエリートの集まり。

そのトップにたつ玲央はひときわ目立つが、その高貴な雰囲気から

一目おかれる存在なのだ。

「じ……神宮寺先輩！！こんにちは！！！」

ペコリと頭を下げる莉央を見て玲央は微笑んだ。

「今日も元気だね」

「そ……そうですか？」

「可愛らしい望月さんの笑顔を見ると、僕も元気が出るよ」

顔が真っ赤になった莉央を玲央の後ろにいる生徒会の竜崎芽衣子りゅうさきめいこが睨んでいた。

「か……可愛らしいって……あの……」

「顔真っ赤だよ？熱でもあるのかな？」

そう言って心配そうに莉央の額に触れようとする玲央の手を魁人が掴んだ。

「ああ、五十嵐くん。こんにちは」

「俺たち教室に戻るんで失礼します」

そう言って魁人は莉央の手を引つ張った。

「ちょ……魁人！！じ……神宮寺先輩、失礼します！！！」

魁人はまるで莉央を玲央から遠ざけるかのようにスタスタと歩いていった。

「玲央さま。いいんですか？五十嵐魁人のあの態度…。」

芽衣子は魁人への腹立たしさをあらわにして言った。

「ああ、いいよ」

「キミって本当に五十嵐くんに嫌われてるよね、玲央」

玲央と対等の立場で話しているのは生徒会副会長、西園寺拓真さいおんじ たくま。

「拓真…」

「怖いよー。その顔。お願いだからその顔でこっち見ないでよ」

「…。五十嵐くんが僕を嫌うのは仕方ないよ」

拓真を無視して玲央は笑顔で2人の去ったあとを見つめた。

「魁人！！あの態度は失礼・・・」

「・・・」

魁人の顔色が悪いのを見て、莉央は口をつぐんだ。

魁人のその顔は入学式のあのときの顔と似ていたから……。

『うわぁ！！お城だ！！』

学園の門の前に立ち、莉央は叫んだ。

『お前、反応が恥ずかしいんだけど…』

あきれたように魁人が言った。

『クスクスクス…』

莉央と魁人はその笑い声に振り返った。

『ああ…。ごめんね、つい…』

魁人はその男を見た瞬間、凍りついた。

『僕は学園生徒会長の神宮寺です』

『あつ…初めまして！！望月莉央です！！』

頭を下げる莉央を玲央は愛おしそうに見ていた。

『キミが望月さんか…。特例の普通科推薦の…』

『あの…えーと…。何かの間違いかと思うんですけど…。一応そつです』

『間違いなんかじゃないよ』

『え?』

玲央は笑い、魁人のほうを見た。

『キミは...』

『五十嵐魁人』

魁人は不機嫌そうに言った。

『ああ...スポーツ科の...』

玲央は魁人の顔を見て微笑んだ。

『玲央。時間だよ』

拓真が玲央を呼びに来た。

『新入生?』

『ああ。望月莉央さん・・・と五十嵐魁人くん』

『この子が?あつ僕は西園寺拓真。学園副会長だよ』

『初めまして!!望月莉央です』

『五十嵐君も初めまして』

『・・・初めまして』

魁人は変わらない顔色で答えた。

玲央は申し訳なさそうな顔をして言う。

『ごめんね。式典の準備に行かなくちゃいけないみたいだ。粗末なあいさつになっちゃったけど・・・以後よろしくね』

玲央と拓真がいなくなり、莉央は魁人に話しかけた。

『噂どおり生徒会の人って綺麗な人だね。特に神宮寺先輩は・・・って聞いている!?!』

『俺・・・あいつ苦手』

そう言った魁人の顔色はとても悪かった。

それから玲央は莉央に会うたびに優しく話しかけてくれた。

「いい人なのに・・・」

魁人と別れ、教室に戻った莉央は1人つぶやいた。

『・・・時は満ちた』

あなたは誰？

『目覚めるのだ』

何を言っているの？

『そなたの役目を…果たすのだ…』

莉央は目を覚ました。

学校が終わり、寮に帰って眠っていたのだ。

「また…。今日はよく見るなあ…」

莉央は記憶の始まりから、よく同じ夢を見ていた。

巫女装束を着た、月明かりと似た美しい銀色の長い髪の女の人の後ろ姿…。

昔はぼんやりとしか見えなかったけど、最近では声まではっきり聞こえる。

「うーん…。気持ちいい…」

莉央は眠れそうもなく、寮をでて学校の庭を夜風にあたりながら散策していた。

すると、前から誰かが歩いてきた。

「やばっ…。消灯後の外出は罰則が!!」

莉央が隠れようとするとその人影が口を開いた。

「…莉央？」

「え？」

その声の主は月明かりに照らされ、魁人だと分かった。

「なんだ、魁人啊…」

「なんだってなんだよ」

「生徒会の人かと思った」

「ビビリ」

「違うもん!!」

莉央はそう言ってから笑った。

「どうした？」

「いや…。なんか魁人とこんな風に落ち着いたところで話すのって施設にいたとき以来だなあと思って…」

「そうか？」

「うん。やっぱり落ち着く」

にっこり笑う莉央を魁人は見つめた。

「0時まわったな」

魁人は腕時計を見て言った。

「え？」

「《誕生日》、おめでとう」

魁人はいつもの無愛想な顔で言った。

「覚えてたんだ？」

「……。お前にとっては今日を《誕生日》って呼ぶのはアレかしんねえけど……」

魁人は空を見ながら言った。

「ううん、嬉しい。ありがとう」

そう言っつて莉央も空を見上げた。

「ねえ、魁人」

「ん？」

「今日はあたしたちが初めて会った日でしょ？」

「ああ」

「今日、あの日と同じ満月だよ」

「ああ……」

「キレイな月だね」

「……。莉央。俺……」

魁人が言葉を言いかけた時、暗闇で何かがつごめきだした。

「なんだ……あれ？」

魁人の言葉に莉央が振り返る。

暗闇でうごめく何かは異形の怪物に変化した。それはまさに《闇》でできているとしか言いようのないほどの憎悪の執念を辺りに散りばめていた。

「何……あれ？」

その《闇》を見た瞬間、莉央の頭を激しい痛みが襲った。

「おい……。これ、夢じゃねえ……よな？」

目の前の光景に魁人は動揺を隠せない。

「莉央……。と……とにかく逃げ……」

言いかけた魁人が目にしたのは頭を抱え、苦しむ莉央の姿だった。

「いたい…。頭…割れる…」

莉央は地面に座り込んだ。

「おい…莉央！！」

怪物は2人に近づいてくる。近づくほどに莉央の痛みは増していた。

「いたい…。何…これ…」

ドクン…

勢いよく跳ねた鼓動とともに莉央の世界がガラリと変わった。

『…時は満ちた』

あなたは誰？

『目覚めるのだ』

何を言ってるの？

『そなたの役目を果たすのだ…。そなたは…』

「大丈夫か！？莉央！！なんなんだよ…これ。マジでヤバ…」

怪物は莉央と魁人の目の前にきた。そして自分を構成している闇を噴射させ、その闇が莉央と魁人に降りかかるうとした。

その瞬間、まばゆい光がはなたれ、その闇がかき消された。

「グルルルルル…」

あまりの眩しさに怪物はうめき声をあげた。

「眩し…い。莉央！！だいじょう…？」

魁人がその光の中に見たのは、見覚えのある顔で巫女装束をまとった少女だった。

「莉…央？」

「グルルルルル…」

怪物はさっきよりも増して恐ろしいうめき声をあげ、少女にとびかかった。

「魁人、下がって…！」

少女の声はやはり莉央のものだった。

状況を飲み込めず立つつくす魁人を莉央は押しつけた。

そして怪物が再び噴射した闇に莉央はただ一人抵抗することなく飲

み込まれた。

「莉央…？莉央！！」

莉央が闇に飲み込まれたのを見て魁人が叫んだ。

「グルルルルル…」

怪物は満足そうにしていたが、いきなり苦しみ始めた。

すると、闇の中から莉央の声が響いた。

「悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉に従え」

莉央の放った言葉により、その怪物に月の紋様が浮かんだ。

「月華降臨、げっかこうりん 暗影滅却！！」あんえいめつきゃく

その紋様はまばゆい光を放ち、闇とともにほじけた。

そしてその中から莉央が現れた。

「消え…た？」

魁人は目の前の光景に驚いていた。

莉央の髪や服がもとに戻り、それと同時に莉央は倒れかけた。

「莉央！！」

魁人は倒れかけた莉央を支えた。

「莉央：なんだよな？」

放心状態の莉央は何も反応しない。

「玲央さま」

生徒会の本郷蒼馬ほんきゆうそうまが生徒会室へきた。

生徒会役員は夜中だというのに生徒会室に集合し、着席していた。

「分かってるよ、本郷」

「失礼いたしました」

「玲央さま、いかがなさいましょう」

芽衣子が口を開いた。

「しばらくは様子を見るさ。すぐに君たちの手を借りることになる」

すると拓真が立ち上がり、玲央にお辞儀をした。

「玲央のために」

それに続いて芽衣子、蒼馬、その他の生徒会役員がお辞儀をした。

「玲央さまのために…」

玲央は微笑を浮かべ、満月を見上げる。

「これはまだ始まりだよ、莉央。いや…ルナ」

「やっと見つけた。ルナの能力…」
ちから

莉央と魁人を見つめる金色の影が1つ…。

「今のは…何？」

「そなたの役目を果たすのだ…」

震える手を押さえながら、莉央は思い出していた。

「そなたは…私と同じ光の魂を宿した…《月の姫》なのだから…

」

月下の契り

「望月莉央。…普通科！？本当にこいつが…？拍子抜けだな」

学生簿を見ながら、男は言った。

『魁人、下がって！！』

違…う

『悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉に従え』

やめ…て

『月華降臨、暗影滅却！！』

「やめてー！！」

莉央は叫び、起き上がった。

「はあ…はあ…はあ…。夢…？いや…違っ」

莉央は昨日の出来事を思い返しては自問自答をくりかえしていた。

「あの力は…何？」

莉央は自分の手を見つめた。

莉央は朝食をとらずに学校へ行き、普段生徒が立ち寄らない校舎裏の温室に向かった。

莉央は人に会いたくなかった。特に魁人には……。温室は美しい花であふれていても心落ち着く場所、莉央のお気に入りの場所でもあった。

「キレイ……」

莉央は後ろに人の気配を感じ、振り返った。

「神宮寺先輩」

珍しく玲央の周りには誰もいなかった。

「温室に人がいるなんて珍しいね」

玲央の優しい顔を見ると莉央はどこか懐かしさを感じた。

「ここ落ち着くんでモヤモヤしたときは来るんです」

「じゃあ今は何かモヤモヤしてるってこと？」

「あっ……えっと……」

莉央が返事に困っているのに気づき、玲央は笑った。

「今日は望月さんの誕生日……だよな？」

「えっ。なんで知ってるんですか？」

「学生簿でチラッと見覚えがあったから…。おめでとう」

玲央は優しい笑顔でそう言った。

その美しい顔に莉央は見とれてしまう。

「望月さん？」

「…あっ！！ありがとうございます」

莉央はいつもの笑顔でお辞儀をした。

「じゃあ、僕はそろそろ行かなきゃ…」

「あの…神宮寺先輩！！ここに用事があったんじゃ…？」

「望月さんの姿が見えたから少し寄っただけだよ。…またね」

そう言っつて玲央は温室から出て行った。

「やっぱり…いい人だ」

莉央はそう言っつて温室を出た。

温室を出て莉央はしばらく校舎裏を散策していた。

「望月莉央。特例の普通科学生」

「え？」

自分のことを話すその声に莉央は反応した。

振り返ると声の主は目の前にいた。

朝日に輝く金色の髪。

背丈は莉央より少し高いくらい。

ブレザーの色からして特学科の生徒のようだが、ブレザーの下に指定のYシャツではなく、パーカーを着ている。

一言で言うと言った目は小学生みただった。

「あ…あの…」

「学力、芸術感性、運動技能、どれも最低レベル。顔もまあまあだな」

その男は学生簿か何かを見ているわけでもなく、全てを知っているかのように莉央を見ながら言った。

「あの!!」

莉央は声を張り上げた。

「何？俺がまだ喋ってるんだけど」

その男はつつた目で莉央を見た。

「えっと…その…誰ですか？」

莉央のその言葉に辺りの雰囲気は凍りついた。

「…。お前、この俺を知らないのか？」

「あの…どっかで会ったことありましたっけ？」

その言葉に男はいつそう不機嫌になり、莉央に背を向け歩きだした。

「あの…!!！」

莉央は男を呼びとめた。

「お前、情報よりも遥かにバカ女」

男は莉央にそう言い放ち、去って行った。

「…何、あの人？」

莉央はさっきの男のことを考えながら教室に行った。

「誰なんだろう…。特学科なのは確かだけど…」

「莉ー央ちゃん」

教室に入ると翼が背後から莉央に抱きついた。

「翼くん…。挨拶代わりに抱きつかないで!!どこの外人!？」

莉央は自分を睨む教室内の女子の視線を避けながら翼から離れた。

「あんまりそっけなくされるともっと本気になっちゃうんだよねえ、オレ」

翼はニコニコしながら言うが、莉央は冗談と分かっているながらも真っ赤になってしまう。

「何？照れてる？カワイイ」

「もう！！からかわないですよー！！」

莉央と翼がじゃれあうと、翼のファンはより一層冷たい視線を莉央に送る。

「望月さん。また翼さんと…」

「ちょっと気に入られてるからって…」

「遊ばれてるのに気付いてないのかしら」

「翼くんが本気なわけないじゃない」

次々に翼ファンは言う。

「あの…聞こえてるんですけど…。てか別にあたしは翼くんなんか…」

「そのカワイイ子たち。そんな顔してグチグチ言っていると…」

莉央の言葉をさえぎり、翼は笑って言った。

「キレイな顔が台無しだよ」

その笑顔はいつもと違ってとても冷たく、ファンの子たちは凍りついていた。

「翼くん…?」

「いやあ、女の子ってのはカワイイよねえ。嫉妬しちゃって」

さっきの冷たい笑顔が嘘かのように、いつものからかうような笑顔で翼は言った。

莉央はそれを見て少しホツとした。

「それが狙いであたしにかまってるでしょ!？」

莉央は頬をふくらませて言った。

「まっさか」。莉央ちゃんは格別。勢いで転科しちゃうくらいだし」

翼の冗談じみた発言に頬を赤らめてしまう莉央はバレないようにつむいてから言った。

「からかってるでしょ…」

「あはは」。あっ莉央ちゃん。このあいだの成績でてるらしいよ」

莉央と翼はこのあいだ行われた特学科と普通科の合同テストの成績開示を見に行った。

このテストで成績がよかった普通科の生徒は特学科へ、逆に成績が悪かった特学科の生徒は普通科へ転科することになる。重大な行事の1つではあるが莉央にはほとんど関係ない話だ。

「ゲッ…」

自分の成績を見て思わず莉央は声をもらした。

「うわぁ…そんな感じの成績だね」

翼は莉央の成績にありのままコメントした。

「ヤバすぎる…」

うなだれる莉央を慰めるように翼が言う。

「大丈夫大丈夫。この学園、特別待遇性は単位とか関係ないんだし」

「そういう問題じゃないよ」

「ほら、オレも似たよーなもんだし」

翼は笑顔で自分の成績を指さす。

「だって翼くんはもともと芸能科じゃん。いざとなれば…また芸能科に…」

「はいはい、泣かない泣かない。特学科じゃないんだから学力試験の成績なんかで落ち込む必要なし」

翼は莉央の頭をポンポン叩いた。

「はあ……。特学科と同じ試験なんてあたしに解けるわけないんだよ！ーうん！ー！」

「確かに特学科も平均点低いしね。0点がいっぱいあっても大丈夫だよ」

開き直る莉央に翼が言った。

「さりげなく点数言わないでくれないかな……？」

「怒らない、怒らない。おっ、やっぱりトップくんは満点だね」

「トップくん？」

莉央は翼に聞き返す。

「ほら毎回満点で1位とってるでしょ？特学科の首席は」

「そっなの！？」

「莉央ちゃん……。いつも成績開示で何見てんの？」

「自分の成績と向き合ってます」

翼は莉央に背をむけ、しばらく肩を揺らしてから再び莉央に向き直

った。

「えっと…ぶふっ！！ごめ…笑いが…」

「翼くん、怒るよ」

「ごめんごめん。ほらアイツだよ」

翼が指さした人物を見て莉央は目を丸くした。

「東条奎雅^{とつじゅうけいが}。特学科の誇る歴代？1の秀才」

翼が指し示した人物、それは莉央が朝会った金髪の男。

「あの人…特学科の首席！？」

「見た目はバカそうなんだけどねえ。莉央ちゃんより」

「翼くん！！」

「冗談、冗談」

笑う翼に莉央は尋ねた。

「ねえ…やっぱりそんな人を知らないってバカ？」

「まあ普通科と特学科はこんな感じで交流多いし、普通は知ってるからね」

莉央は朝の自分の発言を思い返した。

『えっと…その…誰ですか？』

奎雅は莉央の視線に気づき、莉央を鋭い目つきで睨んだ。

「あちゃあ…」

莉央は自分の朝のバカな発言を後悔した。

翼はそんな莉央と奎雅を交互に見てつぶやいた。

「へえ…。あいつまだ何もしてねえんだ…？」

午前の授業が終わり、昼食時間になった。

いつもは魁人と食堂で昼食をとる莉央だが今日は教室にいた。

莉央はしばらく考えてから立ち上がった。

すると、目の前に莉央がちょうど会いに行こうとしていた人物が現れた。

「魁人…」

莉央と魁人は屋上に行った。

「魁人…お昼食べた？」

「いや」

魁人は莉央の顔を見ずに言った。

「食べなきゃダメじゃん」

「お前こそ」

莉央と魁人は目をあわせなかった。

莉央も魁人もかける言葉が見つからず、沈黙は続いた。しばらくして先に沈黙を破ったのは莉央だった。

「ねえ、魁人」

「何？」

「あたしのこと化け物だって思ってるでしょ？」

莉央の言葉に驚き、魁人は莉央の目を見た。

「何言ってる……」

「あたしはそう思うよ。自分のこと」

「莉央。俺は……」

莉央は自分の手をギュツと握り締め、笑った。

「だから、もう無理にあたしと関わらなくていいよ。関わらないほうがいいし、魁人だって関わりたくもないでしょ」

「違う！！俺は……」

「今までありがとうね」

莉央は魁人の言葉をさえぎり、そう言い放って屋上をでた。

「……。目に涙ためて笑うんじゃないよ……」

魁人は唇をかみしめた。

「ケンカ……かな？」

その声に魁人の顔つきがこわばる。

屋上と校舎をつなぐ塔の影からその男は現れた。

「神宮寺……玲央」

「盗み聞きになっちゃうのかな？ごめんね」

「別に」

急いで屋上をでようとする魁人に玲央は言った。

「今日、望月さんの誕生日なんだってね？」

魁人はその言葉に反応し、振り向いた。

「……あんた知ってるだろ？今日があいつにとって本当は何の日なのか」

「どついつ意味かな？」

微笑む玲王を魁人はにらんだ。

「キミは初めて会ったときから僕のことをそついつ目で見ろね」

魁人は玲王のほうへ歩み寄り、玲央の頬をかすめて塔をなぐった。

「痛いだろう？コンクリートは殴らないほうがいい」

魁人は玲央を睨みつけ、屋上を出て行った。
その姿を見つめる玲央は微かに笑っていた。

『そなたの魂は泣いている…』

また…。あなたは誰なんですか？

『そなたは《月の姫》として覚醒したのだ。もう元には戻れぬ…』

月の姫…？覚醒…？何を…言ってるの？

『そなたにできることはただ一つ…』

真夜中、莉央は昨日と同じように目を覚ました。

「あたしにできること…」

「グルルルルル…」

目を覚ました莉央は微かに昨日の怪物と同じうめき声を聞いた。そのうめき声は昨日の記憶を呼び起こす。

『悲しき憎悪の魂よ』

あたしはあの怪物と同じ？

『我が光にその魂を宿し…』

違う

『我が言葉に従え』

違う？何が？

『月華降臨、暗影滅却』

何も…変わらないじゃない

莉央はベッドを飛び出した。

莉央は昨日と同じ場所にいた。

やはり、そこには昨日と同じようにうめく闇があった。

「あたしがやらなきゃ…」

そう言っつて莉央は闇に立ち向かおうとした。

「あれ？」

莉央の身体には何も起こらない。

「どうし…て？」

怪物は莉央のほうへ歩み寄る。

「昨日は勝手に…。なんで…？」

莉央は動揺していた。

しかし、怪物はそんなことなどお構いなしに莉央にせまり、体内の闇を噴射した。

「いやあー!!」

その瞬間、誰かが莉央の身体を持ち上げ、闇の噴射をよけた。

「バカが…」

莉央を抱える人物がもらした声に莉央は耳を疑う。

「魁…人」

月明かりで魁人の顔がはつきりと莉央の視界に映る。

「なん…で？」

莉央は驚きのあまり上手く声を発せられない。

「怖いくせに…1人でくるんじゃないよ」

魁人は莉央の頭をなでた。

「魁人…。魁人だって怖いくせに…。あたしのことだって…」

「お前は…莉央は化け物じゃない」

莉央は目を見開いた。

「…え？」

「確かに昨日のお前は普通じゃない。でも…」

魁人はその優しい目で莉央を見つめて言った。

「俺がずっと見てきたお前はバカでマヌケで…。すぐ落ち込んで、怒って、泣いて…。結局また笑って…。めっちゃくちや感情を表に出すやつで…。そんなヤツが化け物なんて、笑える冗談あるかよ？」

「魁…人」

「お前がどんな力を持ってたって…。そういうお前は…。俺が一緒

にいたいと思うお前は変わらずここにいるだろ？」

莉央の目から涙が溢れた。

「お前じゃなきや、あれは倒せねえんだ。お前があればと1人で向き合っのが怖いっていうなら俺と一緒にいてやる。絶対そばにいる」

魁人は優しく微笑んで莉央の頭にポンツと手をのせた。

「だから、泣くな」

その手から伝わる温もりに莉央はホツとし、目を閉じた。

あたしは化け物じゃない

『覚悟はできたのだな？』

あたしはあたしなんだ

『ならば、願うのだ。そなたの望む力の降臨を…。そなたにできることはただ1つ…』

「『闇を照らすこと』」

莉央の身体からだからまばゆい光が生まれ、莉央の姿は昨日と同じ美しい巫女のものとなった。

「じゃあ、ちょっと行ってくる」

莉央は魁人にそう笑いかけ、怪物の頭上を天高く舞い上がり、言葉をつむいだ。

「悲しき憎悪の魂よ、我が光にその魂を宿し…我が言葉に従え。月華降臨、暗影滅却!!」

闇にうごめく怪物に月の紋様が浮かぶ。

紋様はまばゆい光を放ち、まるで闇を包み込むかのようにしてはじけ、怪物とともに消えた。

闇夜に輝く美しい巫女装束…。

それはまるで孤独な月のよう…。

着地すると莉央の髪や服は元に戻った。

「莉央」

莉央と魁人は見つめあった。

「魁人、ありがとう…」

魁人は急に目を見開き叫んだ。

「莉央、うしろ!!」

莉央が振り返るとそこには新たな闇がうごめきだしていた。

莉央は再び覚醒しようとした。

その時…。

ブレイクサンダーヒースト
「破壊雷獣」

莉央が念じるより早く声が静かに響いた。

そして間もなく、莉央の頬をイナズマのようなものがかすめ、その闇の中の怪物にぶつかった。

それは激しく火花を打ち、怪物とともに消えた。

「怪物が…消えた？」

魁人は驚いていた。

「今の…雷…？」

莉央は自分の頬を流れる血をふいた。

「運のいいやつ。ナレノハテ零落と一緒に葬ってやろうと思ったのに…。」

莉央と魁人はその声のほうへ向きなおった。

その声の主を見た莉央は驚きに目を丸くした。

「東条奎雅…。」

昨日と同様、生徒会室には役員が全員集まっていた。

「姫を守る騎士ナイトとなるか…」

玲央は静まり返る室内で学生簿を見ながら微笑をこぼす。

「…姫を葬る死神となるか」

「昨日のは見間違いじゃなかったみたいだな、バカ女」

雷電を放った男の顔が月明かりで浮かび上がる。

「東条…奎雅…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3307ba/>

永久の誓言

2012年1月10日11時49分発行